

原爆投下とミュージアム

Atomic Bombing and Museum

寺 岡 聖 豪

Seigo TERAOKA

学校教育講座

(平成30年9月28日受付, 平成30年12月3日受理)

はじめに

原爆が投下された直後、きのこ雲の下では何が起こっていたのか¹。人びとの生活は原爆投下によって、どのように変わったのか。これらのことについて直接、知らない世代やそのジュニアの世代にとって、原爆投下とは常に「何か」を媒介して語られるものだった。つまり、彼らは被爆者の証言や被爆体験記、原爆をテーマにした映画、博物館や資料館などを通して原爆投下直後の様子を知ったわけである。そこで、本稿では広島平和記念資料館を手がかりにして、ミュージアムにおける展示について考えてみたい。というのは、被爆体験の継承²という場合、これまでは被爆者が自分自身の被爆体験を語ることが多かったが、その語りは今後難しくなるからである。確かに原爆について書かれた数多くの類書を読めば、被爆体験の継承は事足りるかもしれない。しかし、原爆投下を伝える（教える）メディアとは何かを考えると、ミュージアムの役割は看過できないだろう³。そこで、「被爆体験の語り」の代わりとして広島平和記念資料館における展示に着目し、ミュージアムを通じた被爆体験の継承を考察する。なお、本稿では原爆投下や戦争をテーマとしたミュージアムのことを平和ミュージアムと呼ぶ。

では、平和ミュージアムとは何か。平和ミュージアムでは何を収集するのか。平和ミュージアムは「負の記憶」⁴をどう展示するのか。これらの問いを手がかりにして、ミュージアムを通じた被爆体験の継承について検討したい。

竹沢尚一郎(2015)は『ミュージアムと負の記憶』において、「人類の負の記憶をどう展示するか」と問題を提起した。取り上げられた「負の記憶」は戦争、公害、疾病、災害などである。そして、同書が構想された背景の1つとして「戦争体験者の高齢化」が考えられるだろう。そうすると、彼らが自分自身の体験を語ることができなくなったとき、その語りは途絶えてしまい、被爆体験の継承は難しくなるかもしれない。それに対して、本稿ではミュージアムをめぐる議論を紹介することによって、「被爆者が鬼籍に入り、自分自身の被爆体験を語ることができなくなるとき、人びとはどのようにして原爆投下を知るか」について答えたい⁵。結論を先取りすれば、「フォーラムとしてのミュージアム」という視点から広島平和記念資料館をとらえ直すことによって「被爆体験の継承」の今後を考えたい。

以下、次の順序で考察する。(1)「ミュージアムとは何か」について概観する。その際、文化人類学者、吉田憲司の著書『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで—』をもとにして、ミュージアムの歴史を振り返る。(2)戦後日本の歴史的な文脈に位置づけて、平和ミュージアムとは何かを考察する。その際、山辺昌彦と福島在行の研究を参照する。山辺は「東京大空襲体験の記録化と戦争展示」などに取り組んできた日本史研究者であるのに対して、福島は平和ミュージアムに長年、取り組んできた日本現代史・平和博物館研究者である。(3)広島平和記念資料館の展示について考察する。(4)これらの考察をもとにして、原爆投下とミュージアムについて結語的考察を述べる。

教育（学）の分野で広島平和記念資料館を取り上げたものと言えば、修学旅行との関連で言及したものが

少なくない⁶。それに対して、村上登司文が著書『戦後日本の平和教育の社会学的研究』において各地の平和ミュージアムの動向を取り上げた点は注目に値する。村上が同書の「第7章 博物館・資料館による平和教育」で考察したのは国内外の平和ミュージアムが設立された経緯、各ミュージアムにおける展示、平和学の研究成果を参照した平和ミュージアムのあり方などである。これは平和ミュージアムについて教育学（教育社会学）から光を当てた数少ない研究である。ただし、村上の場合、「ミュージアムを対象化する」視点を管見の限り、若干欠いているように思われる（村田 2014）⁷。それに対して、本稿では『文化の「発見」』を手がかりにして、「フォーラムとしてのミュージアム」という視点から広島平和記念資料館をとらえ直す⁸。

また、平和ミュージアムを取り上げた研究として竹内久顕が編集した著書『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承―』を挙げたい。福島在行は同書の「第17章 平和博物館で／から学ぶということ」において、平和博物館の存在意義や役割について考察している⁹。ただし、紙幅が限られており、「原爆投下とミュージアム」という点では平和博物館の一つとして長崎原爆資料館の名前が言及されるに留まっている。

【検討課題】

- 平和ミュージアムにおいて、原爆投下の「被害」はどのように展示したらよいのだろうか¹⁰。また、「目を背けたくなる」ような惨状はどのように展示したらよいのだろうか¹¹。
- 平和ミュージアムにおいて原爆投下の「被害」がどれだけ悲惨だったかを示すだけでなく、人びとがこれから「何ができるか」を考える契機となる展示とはどのようなものか。
- 原爆投下（戦争）は「伝わりやすい」が、平和は「伝わりにくい」¹²（伊藤 2015）。そうすると、原爆投下の対義語は何か。そして、その対義語となるものはどのようにミュージアムにおいて展示されるのか¹³。

1. ミュージアムとは何か

「『博物館』ないし『美術館』という概念と制度は、いまさらいうまでもなく、明治以降に日本に輸入されたものである」（吉田 2011 47）。そして、日本では絵画、彫刻、工芸品などの美術作品を中心とした文化遺産を収集、保管、展示している施設が美術館と呼ばれるのに対して、考古学資料、歴史的遺物、学術的資料などを収集、保管、展示している施設は歴史系博物館と呼ばれる。また、動物、植物、鉱物、岩石などの資料を扱う施設は自然史博物館と呼ばれる。

それに対して、文化人類学者、吉田憲司は『文化の「発見」』の「はじめに」において次のように述べる。

「文化の表象の場として、人類学（民族学）と民族学博物館は、これまで考えられてきた以上に密接に結びつきながら展開してきた。本書は、一面では、人類学の学説史ではおさえきれない、もうひとつの人類学史を素描する試みである。その作業はまた、博物館と美術館を含めた、ミュージアムという文化の表象の装置の新たな可能性をさぐるという側面ももっている。（中略）博物館・美術館をめぐる今日問われているのは、文化の表象のありかたであり、つまるところ、自己と他者の認識の方法、自己と他者の係わりのありかたである。その意味において、ここで問われている問題は、ひとり博物館・美術館に限らず、人類学一般、さらには地球規模での文化の交流が進む現代に生きる個々人すべてにかかわる問題なのだといわなければならない」（吉田 1999 10）。

本書の課題は近代美術館と民族学博物館における「自文化」／「異文化」の区分を批判的に検討することにあった。吉田自身が述べているように、「博物館・美術館をめぐる今日問われているのは、文化の表象のありかたであり、つまるところ、自己と他者の認識の方法、自己と他者の係わりのありかた」だった。そして、吉田は展示のあり方を次のように整理する。「旧来の展示に欠落していた部分を補おうとする修正主義的な展示。展示という営みそのものを見つめなおそうとする自省的な展示。展示する者とされる者、さらには展示を見るものとのあいだの対話や共同作業を試行する展示。そして文化の担い手自身による『自文化』の展示」（吉田 1999 204-205）。このように吉田は展示のあり方を整理した。

最後に、吉田は『文化の「発見」』において次のように述べる。

「いまさらいうまでもなく、他のあらゆる表象の行為と同様、展示という営みも、われわれ自身のものの見方から自由ではありえない。とりわけ『異文化』を対象とした民族誌展示の場合、自文化中心的な『異文化』像を対象におしつける危険性をはらんでいる。自己の文化のもつ既成の観念にとらわれた『異文化』表象の図式を掘り起こしつつ、展示される側の声をいかに展示に反映させるか。民族誌展示の要件は、いまやその点に集約されるといっても過言ではないように思われる。民族学博物館あるいは民族誌展示の営みの基本が『他者』とのかかわりにある以上、そのありかたになにかひとつのモデルを求めるとすれば、それは、われわれが『他者』とかかわる唯一の方法、つまり対話によって『自己』と『他者』が同じ空間を共有しつつ、ともにわずかずつでも変わっていくというありかた以外にないのではあるまいか」（吉田 1999 206）。

近代の美術館や民族学博物館は吉田によれば、これまで一方的に展示・表象することによって「異文化」を把握し、「異文化」と対比することで「自文化」を構築しようとしてきたという。このように吉田は近代の美術館や民族学博物館の歴史を批判的にとらえることによって、ミュージアムのあり方を根底から問うた。そして、吉田は終章で展示する側／展示される側という非対称な関係をどのように変えていくかについて、新たな視点を提起する。それが「対話」だった。

美術史家、ダンカン・キャメロン（Duncan Cameron）が1970年代に提唱した「テンブルとしてのミュージアム」と「フォーラムとしてのミュージアム」という区別を示唆されて、吉田憲司はミュージアムのあり方を次のように説明する（吉田 1999 216 以下）。前者はすでに評価が定まった「至宝」を人びとが「拝み」に来る神殿のような場所である。それに対して、後者は未知なるものと出会い、そこから議論が始まる場所だという。

「テンブルとしてのミュージアム」は19世紀までのミュージアムのあり方である。一方、「フォーラムとしてのミュージアム」は必ずしもミュージアムの未来像を指すわけではないが、そこに「ミュージアムの将来のありかたの鍵があるように思えて」ならないという。吉田によれば、「フォーラム」では「展示する側と展示される側、さらにはその展示を見る側とのあいだの、比喩的な意味でなく、文字通りの対話の機会が開かれている」（吉田 1999 219）。そして、吉田は述べる、「フォーラムとしてのミュージアム」とは「情報の十字路」であり、「体験の共同体」であると。

展示する側、展示される側、さらにその展示を見る側。このように「フォーラムとしてのミュージアム」を契機にしてミュージアムのあり方を問うことによって、吉田憲司は三者の対話を企図した。本稿ではこの図式を広島平和記念資料館に応用して考察する。

2. 戦後日本と平和ミュージアム

広島平和記念資料館の前身である「原爆参考資料陳列室」が設けられたのは1949年のことである¹⁴。長崎原爆資料館の前身である長崎国際文化会館が開館したのは1955年だった。沖縄戦を取り上げた沖縄県立平和祈念資料館は1975年、ひめゆり平和祈念資料館は1989年に開館した。山辺昌彦によれば、これらのミュージアムは原爆と沖縄戦の被害を伝えるのに大きく貢献した（山辺 2004）。それに対して、空襲を取り上げたミュージアムの開館は遅れていた。仙台市戦災復興記念館は1981年、浜松復興記念館は1988年に開館した。また、大阪国際平和センターの前身である大阪府平和祈念戦争資料室は1981年に作られた。ただし、地方自治体の博物館では戦災コーナーを設けて空襲や戦時中の生活が展示されている。

このように平和ミュージアムの動向を概観できるだろう。それに対して、福島県は平和ミュージアムが誕生する前に、「戦争体験」の継承を目的とした運動がすでに行われていたことを明らかにした（福島 2013）。福島によれば、その運動とは次の3つである。①歴史教育運動（1950年代～）、②空襲・戦災を記録する運動（1970年代～）、③「平和のための戦争展」運動（1980年代～）。

①は戦争学習のなかで「父母の戦争体験」を聞き書きにしたことに端を発するものである。これは「戦争体験」の「継承」の可能性を追求した動きの1つとして数えられる。②は地域における「戦争体験」の掘り起こしが全国的に行われたことを指す。それは戦争体験記の編集だけでなく、空襲展の開催を検討したり、戦争資料の収集・保存・展示のための平和資料館の建設を構想したりするものだった。③は空襲記録運動とは異なり、展示という形で戦争を記録することを志向した。福島によれば、「平和のための戦争展」運動は「国際的には1980年代的な核軍拡に対する危機感であり、国内的には国家主義的教育の進行および軍拡への

危機感」を表明するものだった。

①から③までは平和ミュージアムが誕生する前の前史に当たる。そして、このような経緯を経て、平和ミュージアムが1990年代以降、各地に作られるようになった。たとえば、大阪国際平和センターは1991年、立命館大学国際平和ミュージアムは1992年に設立された。1950年代から、平和ミュージアムが誕生する1990年代までの期間において特徴的なことは以下の3点である（福島 2013）。（ア）戦争と戦争体験を知り（学び）、継承すること。（イ）平和という価値を志向すること。（ウ）広島、長崎、沖縄、空襲に遭った各地の具体的な戦争の姿を知ること。そして、各地の戦争をアジア・太平洋戦争という戦争全体の歴史的文脈に位置づけること。

よく知られているように戦争の体験を記憶し、継承しようとする平和ミュージアムは日本だけでなく、世界各地に作られている。では、原爆投下を展示した広島平和記念資料館ではいったい何を展示しているのか。吉田憲司が提示した「フォーラムとしてのミュージアム」、つまり展示する側・展示される側・その展示を見る側という三者の関係は広島平和記念資料館ではどのようにとらえることができるだろうか¹⁵。

3. 広島平和記念資料館

広島平和記念資料館の目的は次の通りである（リーフレット）¹⁶。

「1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分、広島は世界で初めて原子爆弾による被害を受けました。まちはほとんどが破壊され、多くの人びとの生命がうばわれました。かろうじて生き残った人も、心と体に大きな痛手を受け、多くの被爆者が今なお苦しんでいます。

広島平和記念資料館は、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料を収集・展示するとともに、広島の被爆前後の歩みや核時代の状況などについて紹介しています。

資料の一つ一つは、人々の苦しみや悲しみを訴えています。原爆の惨禍からよみがえったヒロシマの願いは、核兵器のない平和な社会を実現することです。」

広島平和記念資料館の歩みを以下の通りである¹⁷。

1945年8月6日 人類史上初めての原子爆弾が広島市に投下された。

1949年8月6日 「広島平和記念都市建設法」が公布される。

1949年9月 広島市中央公民館に「原爆参考資料陳列室」が設置され、原爆被災資料の公開展示が始まる。

1952年3月 「広島平和記念都市建設法」により平和記念公園の中に恒久平和を記念する施設として平和記念館、平和記念資料館、公会堂、原爆慰霊碑が建設されることになる。

1955年8月 平和記念館と平和記念資料館が開館する。

1958年4～5月 「広島復興大博覧会」が開催される。

1975年 初の大規模改修を行い、展示内容が一新される。

1991年8月 二度目の大改修を行い、大型模型や大画面映像を取り入れられる。

1994年6月 展示・収蔵機能や平和学習の場を充実するため、平和記念館を改築し、平和記念資料館東館として開館する。

■東館…被爆前までの広島、原爆の開発から投下まで、核時代の現状や広島の平和への取り組みについて展示。

■本館…被爆者の遺品や写真などを展示。

2006年7月 本館建物が戦後建築として初めて国の重要文化財に指定される。

2012年11月 附属展示施設として「シュモクハウス」が広島市中区江波二本松一丁目に開館する。

2017年3月 東館がリニューアルオープンし、本館は閉館する。

■東館…「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島の歩み」の3つのゾーンに分けて展示。

2018年4月現在、本館は閉館中だが、3つのゾーンに分けて展示されている。

- ① 導入展示 (1) 被爆前の広島, (2) 失われた人びとの暮らし, (3) 広島平和記念資料館からのメッセージ。
- ② 核兵器の危険性 (1) 原子爆弾の開発と投下, (2) 原子爆弾の脅威, (3) 核の時代から核兵器廃絶へ向けて, (4) メディアテーブル (大型情報検索装置)
- ③ 広島の歩み (1) 戦時下の広島と戦争, (2) 広島の復興 さまざまな支援, (3) 平和な世界をつくるに細分化されている。

唐突な問いかもしれないが、ここでは次のように問いたい。広島平和記念資料館と原爆ドームがなかったら、人びとは今、原爆投下について何を語ることができるだろうか。原爆投下から70年あまり、被爆者の平均年齢が80歳を越える現在、被爆者が自身の被爆体験を語るとは難しくなっている。その意味では、広島平和記念資料館と原爆ドームの存在意義は今後、増すように思われる。

入館者数の概況は以下の通りである¹⁸。

昭和30(1955)年開館から平成28(2016)年度末までの総入館者数 約6,907万人

平成28(2016)年度の総入館者数 約174万人(そのうち外国人 約37万人)

大人 約128万人

小人 約46万人(そのうち修学旅行等 約32万人)

毎日新聞(2017年4月3日)によれば、2016年度の入館者数は過去最高を記録したという。その内訳に着目すると、大勢の外国人や小中高の修学旅行生が訪れたことは注目に値する。「展示する側・展示される側・その展示を見る側」という区分によれば、外国人や修学旅行生は「その展示を見る側」である。では、彼らの目に同館の展示はどのように映ったのだろうか。

広島平和記念資料館には数多くの「被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真」が展示されている。そのなかの1つに、「3人の中学生の遺品」¹⁹(爆心地から900m/小網町)がある。これについて、図録では次のように説明している。

「建物疎開作業の後片づけのため出勤していた市立中学校の1・2年生353人は、その大半が死亡した。これは同校の3人の生徒が身につけていた遺品を集めて籐の人形に着せ、一体としたもの。血のシミが残し、焼け焦げ、ボロボロになった遺品が、子どもたちの思い、そして我が子を失った母親の深い悲しみを語りかけてくる」(葉佐井博巳 2016)。

「籐の人形」を前にして、外国人や修学旅行生はいったい何を思うだろうか。彼らはそれぞれ感想を述べるだろうが、どんな感想であっても、問題はない。なぜなら、彼らは「籐の人形」の来歴を知らないからである。不謹慎な言い方かもしれないが、来館者の感想が「シミのついた、ボロボロの、大昔の布」であっても、誹りを受ける謂われはない。展示物が被爆者の遺品とわからなければ、たとえミュージアムという公的な空間に展示されていても、それは「ほろきれ」に過ぎないからである。ここに、平和ミュージアムの特徴が現れているように思われる。展示品はいわゆる「至宝」ではない。では、平和ミュージアムは原爆投下という「負の記憶」をどう展示するのか。

「博物学とは可視的なものに名を与える作業なのだ」(フーコー 1974 155)。フーコーによれば、博物学が世界の体系性を示すのに用いた手段は何よりも命名による分類という作業だった。そこではそれぞれのものがもともと属していたコンテクストはすべて捨象される。このフーコーの指摘に従うと、「3人の中学生の遺品」に注釈が必要なことは理解できるだろう。ミュージアムにおける展示は仏像を例にして説明すれば、次の通りである。「仏像は(中略)展示という意味創出作用を経由することによって、納屋や本堂から切り離され、照明によって演出された展示ケースの中に配置される。つまり、もともとあった文脈(原文脈)から切り離され(脱文脈化)、展示空間の中で再文脈化されるのだ」(金子 2006)。ミュージアムに展示される場合、このように展示品は位置づけられる。

ミュージアムは近代になってから生まれた。その役割は「記録」と「分類」である。「記録」とは何を残

し、何を残さないかにかかわる行為である。そこでは選別が行われる。また、展示されるモノは何らかのルールによって「分類」されて、ミュージアムという空間に配置される。吉見俊哉によれば、近代のヨーロッパでは異国から持ち込まれた珍しい標本や動植物は目に見える特徴に応じて記述し分類された。そして、それらを展示する空間としてミュージアムが誕生した（吉見 1992）。異国の動物や植物、標本は体系的に「分類」され、「記録」されて初めてミュージアムという空間に配置されるというわけである。

そうすると、先の問い、「籐の人形」＝「3人の中学生の遺品」が「負の記憶」として平和ミュージアムに展示される意味とその作用はどのように考えたらいいのだろうか。これまでは被爆者が自らの被爆体験を語ることによってこそ、「被爆の実相」を伝えることができると捉えられてきた²⁰。しかし、被爆者の語りが今後難しくなっていくことを考えると、「籐の人形」のようにモノを媒介して、「被爆の実相」を伝える場合、リアリティをそこに見出していくことは次第に難しくなるのではないだろうか。たとえ被爆者の遺品が目の前に置かれたとしても、その持主がどんな人たちだったのかを想像することは極めて困難だからである。言い換えれば、「3人の中学生の遺品」の原文脈を再文脈化するには何らかの想像力を必要とする²¹。たとえば、彼らは家族とどんな日々を過ごしてきたのだろうか。彼らが通った学校はどんなところだったのだろうか。建物疎開では彼らはどんな作業をしたのだろうか。これらのことを知ってはじめて「籐の人形」の原文脈に近づけるのではないだろうか。

また「籐の人形」は「3人の中学生」の「形見」とみなすことはできないだろうか。そして、広島平和記念資料館が収集した「被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真」を被爆者の「形見」とみなすことはできないだろうか。そうすると、展示品のキャプションや図録の説明を手がかりにして、来館者は被爆者の人となりを知り、彼らに語りかけることができるかもしれない²²。その結果、数多くの展示品、すなわち被爆者の「形見」を介して、来館者は「原爆が投下された直後、きのこ雲の下では何が起きていたのか」だけでなく、当時、広島に暮らしていた人びとの生活の一端を知ることになるだろう。これは展示する側・展示される側・その展示を見る側という三者の間に対話が成立したとは言えないだろうか。

平和ミュージアムを訪れる人は大人だけでなく、外国人や修学旅行生も想定される。来館者が何らかのコンテクストを解釈しようとする場合、過去の歴史が現在に向けて語りかけるとともに、現在の問題意識は過去へと向かわせる。見方を変えれば、過去のどの時点から語り始めるかによって、語り手の問題意識がどこにあるかが照射される。それゆえ、「その展示を見る」のは誰かという問題は「展示する側」にとって無視できない。展示されたモノの「原文脈」を想像することが不可欠だからである。吉田憲司が提唱した「フォーラムとしてのミュージアム」に従うと、「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島歩み」の3つのゾーンに分かれた展示は「展示を見る側」にとって、「情報の十字路口」となる²³。遺品や写真、資料（モノ）、すなわち「展示された側」は情報に位置づけられる。そして、順路にそって展示を見る行為は「展示される側」、すなわち収蔵品を「展示する側」のまなざしに即して見ていくことでもある²⁴。また、修学旅行で訪れる小中高生をはじめとする来館者は追体験という形で、原爆投下を学ぶ「体験の共同体」でもあった。

したがって、広島平和記念資料館は原爆投下に関する資料を単に収蔵・展示するだけの「箱物」ではない。同館は原爆投下をテーマとして、戦前・戦後の広島（街と暮らし、人びとなど）を想起したり、比較したりして、人びとが意見を交わす「孵卵器」と位置づけられないだろうか²⁵。

おわりに

被爆者がいなくなる時期は近い将来に訪れる。だからといって、語り部がいなければ²⁶、被爆体験の継承が不可能というわけではない。というのは、以上の考察から明らかなように、被爆者の語りと同じような働きを平和ミュージアムに期待できるからである。原爆投下を伝える場合、これまで語り部は欠かせない存在だった。しかし、これからの時代は被爆体験を媒介する役目は「ヒトからモノへ」移行するのではないだろうか²⁷。

また、原爆は人びとに「理不尽な死」をもたらすだけでなく、そこから逃れた人々にも「生きる苦しみ」を与えた。だから、「被爆者がこう言っている」と伝えるだけでなく、「私たちはこれから、どうすればいいのか」をより多くの人たちが考えることができるように被爆体験を継承しなくてはならない。そのためには自身の被爆体験を語ることでできる人がいなくなる前に、改めて考えなくてはならないのは次のことである。平和ミュージアムはすでに評価が定まった「至宝」を人びとが「拝み」に来る神殿のような場所

はない。だから、来館者が「原爆投下とは何か」を反芻できるように、遺品（モノ）や写真、資料を分類し、原爆投下（コト）を俯瞰的に捉えられるように展示することである²⁸。とりわけ展示されたモノ（遺品）の「原文脈」を知るためには、原爆投下「以前」の町と暮らしに関する展示は欠かせないだろう。原爆投下「以前」と「以後」を比べて、人びとの暮らしがどのように変わったかを学ぶことは「平和な日常」を考えることにもつながるからである²⁹。そして、その学びは「私たちがこれから、どうすればいいのか」にも向かうだろう。被爆者がいなくなる時期は近い。残された時間は限られている。

注

- 1 NHK 戦争証言アーカイブス「特集 広島原爆～きのこ雲の下で何が起きていたのか～」では写真をもとにして原爆が投下された直後の様子を紹介している。

https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/special/hiroshima_genbaku/ 2018年8月8日アクセス。

- 2 「継承」の意味は「受け継ぐ」だが、その用例は「戦争体験を継承する」、「皇位を継承する」などである。また、類似した言葉として、「伝承」が挙げられる。その意味は「古くからの制度・風習・信仰・言い伝え（などを、受け継ぎ伝えていくこと）」である（『第7版 新明解国語辞典』三省堂 2012）。このように「継承」、「伝承」はともに「受け継ぐ」という意味で用いられる。ただし、「戦争体験を継承する」という場合、単に「受け継ぐ」のではなく、「戦争体験」の意味を再検討したり、吟味したりすることが（暗に）求められているのではないだろうか。

- 3 論者は平和教育のバイブルと言われる長田新編『原爆の子』（1951）や中学校の教科書、社会科・歴史的分野を対象にして、「原爆投下がどのように語られてきたか」を検討した。前者（寺岡 2015）では2つのメディア、子どもたちの原爆体験記とこれを原作とした映画を取り上げた。後者（寺岡 2018）では社会科の教科書を取り上げ、原爆投下を巡ってその記述を検討した。また、「原爆を語る」ことが被爆証言（自ら被爆した事実（体験）を語ること）、反戦メッセージ（反戦平和の思想と接合しながら、自らの被爆体験を語ること）、記憶の継承（修学旅行での語り部など、被爆者が自らの体験を語り、伝えていくこと）、記憶の復元（被爆者ではない者が原爆について学び、語ること。広島市「被爆体験伝承講話」事業）などに分類できることを明らかにした（寺岡 2017）。

このように論者は「原爆投下が何をもたらしただか」を伝えるメディアに着目して、「被爆体験の継承」について考えてきた。なお、原爆を取り上げたメディアには小説や映画、テレビ・ドキュメンタリー、マンガなども含まれる。

- 4 「負の記憶」については今後さらに検討したい。なお、「負の記憶」には家族の問題（不和、離婚など）、仕事の問題（ミス、トラブルなど）、学校の問題（不登校、いじめなど）などが含まれるだろう。しかし、本稿で対象とする「負の記憶」は災害関連のものとする。災害の分類については防災専門図書館を参考にした。同館の蔵書は火災、風水害・雪害、地震・噴火・津波、交通災害、農業災害（農林漁業に関するもの）、鉱・工業災害、公害（放射能汚染を含む）、戦災などによって構成されている。

<https://www.city-net.or.jp/library/> 2018年8月8日アクセス。

- 5 厚生労働省のホームページ、「被爆者（被爆者健康手帳所持者）数の推移」によれば、現在の被爆者数は154,859人である（平成29年）。

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000049131.html> 2018年8月8日アクセス。

なお、「原爆は遭ったものにしかわからない」と口にする被爆者は少なくなかった。また、子どもや親しい人にさえ、被爆体験について語らなかった人も少なくない。

共同通信が2018年6月に実施した「被爆者アンケート」によれば、「6割以上が自身の被爆体験を語っていない」と回答した。その理由として「高齢による体力の衰えや幼少期の記憶の乏しさ」が挙げられる一方、「原爆投下から70年を過ぎてもなお脳裏に焼き付く惨状に胸を痛め、口をつぐむ人も」いることが指摘された（西日本新聞、2018年7月29日）。【このアンケートは日本原水爆被害者団体協議会（被団協）に加盟する各地の被爆者団体などの協力により、全国の被爆者約6,000人に配布し、1,450人から有効な回答が得られた。】

- 6 『新版 広島長崎 修学旅行案内』（松元 1998）では（1）修学旅行に出発するための事前指導、（2）広島と長崎それぞれについて見学先に関する案内などが掲載されている。『訪ねてみよう 戦争を学ぶ

ミュージアム／メモリアル』（〔記憶と表現〕研究会 2005）は戦争を学ぶためのガイドで、広島や長崎のほか、沖縄戦や空襲などについて学ぶことができる各地のミュージアムが紹介されている。

- 7 メディア論やミュージアムを研究する村田真理子は次のように述べる。「ミュージアムという存在を対象化し、異化できる視点を獲得することは、換言すれば、ミュージアムを、社会の様々な価値や意味を媒介させる動的なメディアとして捉えることを意味する」（村田 2014 11）。そして、村田はその一例としてスミソニアン原爆展示論争を取り上げている。

この論争について、日本戦後史・被爆史研究者、宇吹暁は次のように述べている。「国立スミソニアン航空宇宙博物館は、原爆投下 50 周年を記念して、『クロスロード—第二次世界大戦の終結、原子爆弾、そして冷戦の始まり—』との名称で特別企画展を開催しようとした。この企画は広島へ原爆を投下した爆撃機 B29『エノラ・ゲイ』とあわせて広島・長崎の被爆資料を展示し、アメリカ国民の間に根強く定着している『原爆投下の正当性』を問い直そうとする野心的な試みであった。／1994 年 3 月、展示シナリオの概要が明らかになると、アメリカ国内では退役軍人協会を中心に、この企画に反対する動きが起こった。こうした動きは、同年 9 月には連邦議会上院が全会一致で同博物館に企画の修正を求める動きにまで発展した。結局 95 年 1 月にはスミソニアン協会が、エノラ・ゲイを中心とした展示への変更を決め、被爆資料の展示は取りやめとなった（以下、省略）」（宇吹 2014 286）。

- 8 福島在行は『「フォーラム」としての平和博物館は可能か？—吉田憲司の提言から考える—』において、「フォーラムとしての平和博物館」を提起している（福島 2006）。論者は吉田と福島の研究を参照して、広島平和記念資料館のあり方を改めて考えてみたい。

- 9 福島は「平和博物館で／から学ぶということ」において（1）展示から学ぶ、（2）展示を取り巻くものから学ぶ、（3）自分の心と身体への反応から学ぶ、という 3 つの視角を挙げている。これらは吉田憲司が提言した「フォーラムとしてのミュージアム」と重なる部分があるように思われる（福島 2011 190 - 194）

- 10 原爆投下に関わる「被害」とは何か。この問いに答えるのは簡単なことではない。というのは、日本は「被害者」であるとともに「加害者」だからである。それゆえ、「被害」と「加害」のどちらか一方だけを上げることでは不十分だろう。

たとえば、松元寛（松元 1996 31）は次のように述べる。「広島の被害について、ときに、無抵抗な市民を残酷な爆弾で無差別に殺傷するとは非人道極まりないという非難がアメリカ軍に向けられますが、この爆撃が、目標である第二総軍司令部を中心とする軍事施設からわずか数百メートル外れたところに投下されていることを、私たちは認めておかななくてはなりません」。なお、広島で被爆したのは日本人だけではない。

また、原爆投下による「被害」に言及すると、広島の被爆者であり詩人でもある栗原貞子の詩「ヒロシマというときに」のように旧日本軍が引き起こした問題に直面することにもなるだろう（「〈ヒロシマ〉というとき／＜ああ ヒロシマ＞とやさしくこたえてくれるだろうか／＜ヒロシマ＞といえば＜パールハーバー＞／＜ヒロシマ＞といえば＜南京虐殺＞・・・」）。

このように原爆投下に関わる「被害」について答えることは「慎重さ」を要する。それゆえ、「原爆投下は人類の普遍的な悲劇なのか」と問えば、その反応は日本と海外では分かれるかもしれない。しかしながら（ここでは詳しく述べないが）、それでもやはり原爆投下をすべての人類に対する普遍的な問題としてとらえ、原爆投下の悲惨さを伝えることについて考えたい。

- 11 広島平和記念資料館では 2018 年現在、改修工事が行われているが、「炎に包まれたがれきの街を、焼け焦げた衣服をまとい、やけどした両腕を前に突きだして歩く 3 体の人形は撤去される」という（新聞記事「被爆前後の広島 ジオラマに C G」朝日新聞 2017 年 4 月 26 日）。これは「被爆再現人形」と呼ばれ、本資料館で最もよく知られた展示物だった。

同記事によれば、「撤去案が浮上した 2010 年以降、『原爆の恐ろしさが一目でわかる』と展示継続を求める意見が相次いだ。資料館は（撤去の理由を、引用者が補足した）『模型やジオラマではなく、被爆者の遺品など実物の資料中心の展示にするため』と説明した。

- 12 原爆投下（戦争）は「伝わりやすい」が、平和は「伝わりにくい」。平和ミュージアムを定義することの難しさはこの点に関係しているだろう。

- 13 原爆（投下）というテーマはあらゆる角度から論じ尽くされている。それゆえ、新たな視点を得ること

は難しい。ただし、「原爆投下とミュージアム」については検討する余地があるように思われる。

- 14 『図録 ヒロシマを世界に』（葉佐井博巳 2016 108）によれば、「1946 年（昭和 21 年）には、原爆被害調査も本格開始し、被害の状況を伝える被爆資料への市民の関心も高まってきた。市民を中心とした被爆資料の収集体が組織されて、いち早く収集が開始され、被爆者をはじめ多くの市民の協力が寄せられた。1949 年（昭和 24 年）9 月、中央公民館の 1 室に設けた『原爆参考資料陳列室』は、机や椅子の上に被爆した瓦や石などを並べて、簡単ながら、始めて被爆資料を常設展示した」という。

なお、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は 1945 年 9 月 2 日にプレスコードを実施し、検閲を開始した。「この検閲の目的の一つは、原爆被害の実相の隠蔽だったと言われており、これがその後の原爆症をはじめとする被爆の実相についての無知や無関心につながったとの指摘もある」（繁沢 2010 はじめに）。ただし、プレスコードが「原爆参考資料陳列室」にどのような影響を与えたかは管見の限り定かではない。

- 15 広島平和記念資料館の主たる目的の 1 つとして、「誰とともにどのような未来を築くか」という問題を挙げることができるだろう。その際、「展示を見る側」（来館者）の大多数が今や「戦後生まれ」であることは看過できない。原爆投下の被害がどれだけ悲惨だったかを示すだけでなく、これから自分に何ができるかを考える契機となる展示。言い換えれば、他人事ではなく、「わがこと」として受けとめる展示。これはどのようにしたら実現できるのだろうか。その際、注意しなくてはならないのは「展示を見る側」（来館者）に「原爆投下の惨状を伝える資料（モノや写真）がもたらす苦痛」である。この点については今後の課題としたい。

なお、福島（2006）は「展示する側」と「展示される側」の緊張関係について言及するが（誰の被害が展示され、誰の被害は展示されないのかという、境界線の設定の問題など）、「展示を見る側」については管見の限りあまり言及していないように思われる。

- 16 広島平和記念資料館ホームページ

<http://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/447/Jp.pdf> 2018 年 8 月 8 日アクセス。

- 17 広島平和記念資料館の公式ホームページによれば、同資料館の歩みが示されている。

http://hpmmuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=21 2018 年 8 月 8 日アクセス。

- 18 http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1461150515582/simple/01_02.pdf 2018 年 8 月 8 日アクセス。

- 19 これは「三位一体の遺品」と呼ばれた展示物である。「三位一体の名が示すように、これは 3 人のものを集めてやっと 1 体となった当時の学生服である。その 3 人とは、福岡肇君、津田栄一君、上田正之君の 3 人だった。3 人とも、広島市立中学校の生徒で、それぞれがひとり息子だった。服とズボンが福岡肇君のもの、帽子とバンドが津田栄一君のもの、ゲートルが上田正之君の遺品だった。（中略）『三位一体の遺品』を残した 3 人の子どもたちは、いずれも広島市立中学校の生徒だった。当時、広島市立中学校は爆心地から 1.4km の中広町にあった。開校が昭和 17 年 4 月、校舎は木造 2 階建て、22 教室、できて 4 年目という新しい学校だった。（中略）6 日当日、1、2 年生各 1 クラスだけが登校日で、その他のクラスは、小網町で建物疎開作業の跡（ママ）片づけに当たることになっていた。その中に、福岡肇君、津田栄一君、上田正之君の 3 人もいた。その日登校した 1、2 年生各 1 クラス、合わせて 147 人は、朝礼のため運動場に出て整列し、教師たちが出てくるのを待つばかりだった。その瞬間の炸裂だった。校舎は押しつぶされ瞬時にして全壊。多くの生徒がその下敷きとなったり、破片に当たって即死した。かろうじて倒壊物の下からはい出した職員や生徒たちは、だれもが全身火傷の重傷を負い、生死の境をさまよい歩いた」（高橋 1982 41-46）。

- 20 「被爆の実相」という言葉はこれまでしばしば用いられてきた。たとえば、広島平和記念資料館では次の通りである。「被爆の実相」は同館の使命と果たす上で欠かせないものであり、中心的な展示に位置づけられる。そして、その展示は「8 月 6 日のヒロシマ」と「被爆者」という 2 つのゾーンにおいて行われる。前者では「被爆当日の凄惨な広島被害状況を被爆資料や写真、『市民が描いた原爆の絵』で」伝えている。それに対して、後者では「1 点 1 点の遺品に向き合う」形で展示されている。詳しくは下記を参照のこと。

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1410483567544/index.html> 2018 年 8 月 8 日アクセス。

なお、実相は仏教のことばである。『岩波 仏教辞典 第2版』（中村元ほか編 2002 岩波書店）によれば、実相とは「真実のすがたの意。すべての存在の、ありままのほんとうのすがた（実相）のこと」である。

ところで「被爆の実相」というと、何らかの答え、「正解」があるように感じられるかもしれない。しかし、ここで注意したいのは「原爆投下が何をもたらしたか」を媒するメディアには多様性が認められるということである（被爆者の語り、資料（モノ）、絵画、写真など）。さらに「被爆の実相」という場合、被爆者たちの悲惨な姿を提示するだけでは十分ではないように思われる。

この点について示唆的なのは宮澤康人の指摘である。宮澤は次のように述べる。「人間本性にある暴力性と、他方で、人を、そして生き物を殺すことに罪障感を抱く、という矛盾する本性の両面を理解しつつ、特に、暴力性とナショナリズムが結合しやすいことを警戒する感性を私たち大人自身がどうやって身に付けるか、それを若い世代にどう伝えられるか考えぬかなければなりません」（宮澤 2015）。この指摘は必ずしも「被爆の実相」に言及したわけではないが、「被爆の実相」を伝える（教える）場合に避けて通ることのできない問題だろう。そして、平和教育・平和学習はこれまでこの問題について、どのように答えてきたのだろうか。この点について今後の検討課題としたい。

- 21 広島平和記念資料館では来館者に貸し出している音声ガイドにより、遺品の持主を紹介している。ガイドを務めたのは女優、吉永小百合である。

TBS ラジオの番組「荻上チキ Session-22」（月曜～金曜、22時～24時）では2018年8月3日に特集「広島原爆の日を前に、聴く原爆資料館」を放送した。同番組のホームページによれば、その内容は次の通りである。「現在リニューアル工事中の広島平和記念資料館でこれまで使われてきた女優・吉永小百合さんの音声ガイドを特別に許可をいただき、オンエア。展示されてきた遺品は何を伝えているのか、音声を活用して資料館見学を疑似体験。下に展示品のリンクを掲載してありますので、お聴きの際は合わせてご覧ください」。なお、当日の放送はTBS ラジオクラウドにより聞くことができる。

<https://www.tbsradio.jp/276933> 2018年8月8日アクセス

- 22 ただしキャプションが詳しすぎると、平和ミュージアムに足を運ばなくても関連図書を読めば事足りるかもしれない。広島平和記念資料館では実物資料だけでなく、平和データベースによって戦争資料を公開している。

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/database/> 2018年8月8日アクセス。

- 23 梅棹忠夫は『メディアとしての博物館』において、博物館を情報産業としてとらえることを提起した（傍点は引用者）。「博物館が市民に提供できるものは、物質ではない。（中略）博物館が提供できるのは、ただ情報だけである。その意味では、博物館は新聞よりもテレビに似ている。新聞は、まだ新聞紙という物質媒体にのせられて、情報消費者の手もとにとどけられるのであるが、博物館は、そのような物質媒体をともしなわぬ。博物館活動は（中略）もっとも基本的にはただものが展示してあるだけである」（梅棹 1987 179/180）。

- 24 ミュージアムの展示を観る際の順路については「ギャラリーの歴史」が参考となる。ギャラリー（gallery）とはもともと建物の外側の回廊という意味だが、アレクサンドロス大王の時代に、収集した美術品をそこに並べたことから、美術品の展示場を指すようになったという。美術の世界では美術館内の各室、あるいは美術商の展示スペースを意味する（吉田 2011 36-46）。

- 25 沖縄タイムスは社説において次のように述べる（2018年6月23日）。「上からの押しつけによって知識を詰め込むのではなく、ことりと胸に落ちる経験を大切にする。平和教育や平和学習に対するマンネリ感に向き合わなければ若い人たちの『沖縄戦離れ』を食い止めるのは難しい」。これは広島への原爆投下にも当てはまるだろう。

原爆投下の被害がどれだけ悲惨だったかを示すだけでなく、これから自分に何ができるかを考える契機となる展示。他人事ではなく、「わがこと」として受けとめる展示。そのような展示を考えることこそ、「フォーラムとしてのミュージアム」ではないだろうか。

- 26 広島市では2012年度より「被爆体験伝承者養成事業」を開始し、被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を養成している。詳しくは広島市のホームページ、下記を参照のこと。

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1525154329974/index.html> 2018年8月8日アクセス。

また、広島市立基町高等学校普通科・創造表現コース、美術部は2007年度より被爆体験証言者の証言をもとにして「原爆の絵」を描く活動に取り組んできた。その目的は「被爆者が高齢化するなか、被爆の実相を絵画として後世に残すこと、絵の制作を通して、高校生が被爆者の思いを受け継ぎ、平和の尊さについて考えること」である。これまでに描かれた絵は126点（2018年）に上る。そして、広島平和記念資料館では「被爆の実相を広く発信するため」に「原爆の絵」の複製画を貸し出している。なお、同校の取り組みを契機にして演劇やドラマが制作された。【東京の青年劇場、「あの夏の絵」（2015年初演）。NHK広島放送局、ドラマ「ふたりのキャンパス」（2017年8月放送）】。

高校生たちによって制作された「原爆の絵」は「ミュージアムにおける展示」とは異なるが、描いた高校生には他人事ではなく、「わがこと」として受けとめられたように思われる。したがって、「原爆の絵」を描くことは高校生にとって「ことりと胸に落ちる経験」となったのではないだろうか。なお、「原爆の絵」の制作は広島平和記念資料館の主催事業「次世代と描く原爆の絵」として行われた。作品は下記から閲覧可能である。

<http://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/396/MotomachiABombDrawing.pdf> 2018年8月8日アクセス。

広島平和記念資料館の主催事業「次世代と描く原爆の絵」については下記を参照のこと。

http://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/482/motomachi_overview.pdf 2018年8月8日アクセス。

筆者は2018年8月6日、「次世代と描く原爆の絵」のギャラリートーク（広島国際会議場）に参加し、基町高校美術部の高校生及び橋本一貫教諭にインタビューした。ここに記して感謝したい。

- 27 原爆が語り継ぐべきものであるならば、被爆者＝当事者だけが語っていくのでは先細りしかないだろう。原爆の語りは当事者性から新たな段階に来ているのではないだろうか。この点に関して金子淳は「モノを媒介とした戦争体験の継承をめぐる」考察するなかで、「ヒトに替わってモノが戦争を語るようになり、戦争を語る場としての博物館が大きな意味をもつようになる」（金子 2006）と述べている。
- 28 広島平和記念資料館では展示を随時入れ替えている。たとえば、「オバマ前大統領の広島訪問関連展示」として、折り鶴とメッセージ（複製）が新たに展示された（2017年7月11日～2019年3月29日）。折り鶴はオバマ前大統領が2016年5月27日、平和記念公園と広島平和記念資料館を訪れた際に折られたものである。

また、同館では「原爆被害の実相を伝えるための貴重な資料として、被爆者やその遺族が保存されている被爆資料の収集・保管に努めて」いる。平成28年度（2016年度）は新たに54人の方から638点の寄贈があり、その中から124点を展示している。

広島平和記念資料館ホームページ

http://hpmmuseum.jp/modules/exother/index.php?action=PageView&page_id=15&lang=jpn 2018年8月8日アクセス。

なお、平和ミュージアムに展示されているもののなかには「見たくないもの」も含まれるだろう。それゆえ、「原爆投下とは何か」を反芻することは来館者にとって、極めて重たい思想的課題の1つとなるように思われる。

- 29 伊藤が戦争と平和のイメージについて述べている通り（伊藤 2015）、原爆投下「以後」の惨状は「伝わりやすい」。不謹慎な物言いとなるが、被爆の惨状は「絵になる」。それに対して、原爆投下「以前」の「平和な日常」は「伝わりにくい」、イメージしにくいのではないだろうか。

参考文献

- 伊藤剛 2015 『なぜ戦争は伝わりやすく平和は伝わりにくいのか—ピース・コミュニケーションという試み—』 光文社
- 宇吹暁 2014 『ヒロシマ戦後史—被爆体験はどう受けとめられてきたか—』 岩波書店
- 梅棹忠夫 1987 『メディアとしての博物館』 講談社
- 小倉康嗣 2013 「第8章 被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ—なんのために、どのように表現するのか—」（浜日出夫ほか編 『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承—』 慶應義塾大学出版

会)

- 金子淳 2006 「戦争資料のリアリティーモノを媒介とした戦争体験の継承—」(成田龍一編 『岩波講座 アジア・太平洋戦争 第6巻 日常生活の中の総力戦』 岩波書店)
- 〔記憶と表現〕研究会 2005 『訪ねてみよう 戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』 岩波書店
- 高橋昭博・NHK取材班・土田ヒロミ 1982 『きみはヒロシマを見たか 広島原爆資料館』 日本放送協会
- 竹内久顕 2011 『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承—』 法律文化社
- 竹沢尚一郎 2015 『ミュージアムと「負の記憶」—戦争・公害・疾病・災害：人類の「負の記憶」をどう展示するか—』 東信堂
- 寺岡聖豪 2015 「『原爆の子』と戦後教育—反戦メディア—(要旨)」(幼児教育史学会 第10号)
- 寺岡聖豪 2017 「『原爆を語る』と平和教育」(『福岡教育大学紀要 第66号 第4分冊』)
- 寺岡聖豪 2018 「歴史教科書の中の原爆問題」(『福岡教育大学紀要 第67号 第4分冊』)
- 葉佐井博巳・宇吹暁・井手三千男監修 2016 『図録 ヒロシマを世界に』 広島平和記念資料館
- 繁沢敦子 2010 『原爆と検閲—アメリカ人記者たちが見た広島・長崎—』 中央公論新社
- 福島在行 2006 「『フォーラム』としての平和博物館は可能か?—吉田憲司の提言から考える—」(『立命館 平和研究』第7号)
- 福島在行 2011 「平和博物館で／から学ぶということ」(竹内久顕 『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承—』 法律文化社)
- 福島在行 2013 「平和博物館と歴史—「戦後」日本という文脈から考える—」(日本史研究会 『日本史研究』) 第607号)
- ミッシェル・フーコー 渡辺一民訳 1974 『言葉と物—人文科学の考古学—』 新潮社
- 松元寛 1998 『新版 広島長崎 修学旅行案内』 岩波書店
- 宮澤康人 2015 「寄稿 教育学の＜戦前＞責任 シンポジウム「子どもと戦争」によせて」(Web版 幼児教育史学会会報 第19号)
- <http://youjikyoiikushi.org/Kaihou019WebVer.pdf> 2018年8月8日アクセス
- 村上登司文 2009 『戦後日本の平和教育の社会学的研究』 学術出版会
- 村田麻里子 2014 『思想としてのミュージアム—ものと空間のメディア論—』 人文書院
- 山辺昌彦 2004 「日本の平和博物館の到達点と課題」(歴史教育者協議会 『増補 平和博物館・戦争資料館ガイドブック』 青木書店)
- 吉田憲司 1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで—』 岩波書店
- 吉田憲司 2011 『改訂新版 博物館概論』 放送大学教育振興会
- 吉見俊哉 1992 『博覧会の政治学—まなざしの近代—』 中央公論新社

本稿はJSPS 科研費(17K04871)による研究成果の一部である。